評論

幼児教育・保育と環境教育 —教材論の立場から

今村 光章（岐阜大学）

Early Childhood Care and Education
and Environmental Education from the
Perspective of Learning Materials

Mitsuyuki IMAMURA

Gifu University

（受理日 2009年6月12日）

1. 全体的なコメント

井上論文は、幼児期の環境教育に関する総説論文として極めて高く評価できる。まず、評価できる点を申し述べ、次に、僭越であるが若干の補完すべき点を述べる。最後に、幼児期の環境教育の教材について触れたい。

筆者の井上美智子は、2003年までに日本で出された幼児期の環境教育に関する先行研究文献をくまなく調べ上げるといふ力作の総説論文を執筆している。この論文で、井上は「現在までに幼児期の環境教育の実践がなかったわけではない」（井上 2004）という表現で、幼児期の環境教育の動きが鈍いことを示唆している。この見解を踏襲し、今回の井上論文でも、日本の保育学・幼児教育学研究において、教育内容に関して踏み込んだ研究が少なく、他の学童期・青少年期・成人期を対象にした環境教育の実践活動に関する論文に比べて、全般的に先行研究が少ない点を指摘している。

今回の論文では、日本国内の先行研究ばかりではなく、広く海外の文献を調べ、国外の先行研究で幼児期の環境教育に関して多少なりとも具体的な教育内容が示されていることを明らかにしている。しかしながら、そのような海外の研究が、国内における幼児期の環境教育に与える影響は大きくはなく、まだまだ幼児期の環境教育は黎明期に

あるという指摘はもっともである。

実践の領域においてだけではなく、幼児期の環境教育についての理論的言説についても、発展的議論がなされず散発的に執筆者の自説が強調されているのみで、教育現場には影響力をもつには至っていないというご指摘にも首肯できる。しかし、これは幼児期の環境教育に限ることではなく、環境教育全般に言えることであろう。

さらに、井上論文は、専門外の方々に、「保育内容の指導法「環境」（領域「環境」）イコール環境教育ではない」ことをご理解していただく困難さに対処されている点でも高く評価できる。

2. 補足したい点

ないものねだりのようで恐縮であるが、もし、許されれば補完しておきたい3点がある。

第一に、保育所と幼稚園のそれぞれの由来と歴史、現在の制度的背景による限界があることが十分に述べられていない点である。昨今、保育所には、環境教育を中心に据えて教育実践に取り組む以前に、対処すべき課題が山積している。保育所にこれ以上の過大な教育要求を突きつけるのは困難であるようにも考えられる。そのことも踏まえて、幼児期の環境教育の限界を見極める必要がある。また、幼稚園においては、多少なりとも環境教育に積極的に取り組まれているところもある。そうしたことも補足しておきたい。

第二に、幼児期の環境教育に関する哲学、すなわち、幼児環境教育に関する原理的研究の必要性を指摘されているが、それは幼児期の環境教育に限るわけではない点も強調しておきたい。環境教育とは、環境とは、自然とは、といった理念研究や原理研究の必要性は、他の分野でも同様である。幼児期の環境教育実践とそれに対する議論が発展しないのは、もっぱら幼児教育と保育の業界に関わるものたちだけが責を負うべき問題ではない。むしろ、私たちのような環境教育（学会）関係者が全体として取り組むべき課題であると考ええる。

第三に、家庭教育の視点がそれほど盛り込まれてはいない点についても注意しなければなるまい。一般に幼児期の教育を担う場は、集団保育（保育所・幼稚園）の場、家庭保育の場、地域保育の

問い合わせ先 〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 岐阜大学教育学部
E-mail: imamura@gifu-u.ac.jp

場がある。家庭でも、どのように環境教育を進めるかといった視点が必要であろう。

以上の補足点は井上論文全体の評価を損なうものでは決してない。紙幅の都合で致し方ないことは十分に承知している。

3. 幼児期の環境教育の教材について

最後に、ご依頼を受け、教材論からのコメントを付け加えておきたい。

幼児期の環境教育の教材となる可能性のあるものは、「自然」としての庭（幼稚園・保育所の園庭）である。こうした庭が幼児期の環境教育の格好の教材となる。幼稚園教育においては、子どもの発達のふさわしい時期に、ふさわしいものを、教育的配慮から順序良く与えるという教育学的な視点がある。この視点に基づいて、園庭を充実させ、それに子どもを触れさせていくことが幼児期の環境教育において重要であると考ええる。

他方、森や川、山などの「意図せざる偶然」が起こるナマの自然の体験も必要である。そうした意味で言えば、デンマークで始まり、ドイツや北欧で広まった「森のようちえん」が日本にも普及していることに注目したい。教育的配慮をそれほど払われていない森や林に入ることによって、子どもたちは感性を研ぎ澄ましたり、自然との付き合い方を学んだりする。

もっとも、どのような自然をどのような順序で、どのような発達区分の子どもに体験させるかという課題は残る。それでも、幼児期の環境教育の教材とは、第一には、やはり自然そのものであると思われる。

第二に、動物飼育や植物の栽培、動物園などで生物に触れることが環境教育の教材となる。園では、何らかの動物が飼育されていることがあるが、その動物のえさの世話などを通じて、子どもは自分が動物ではないことを知り、動物との比較対照で人間であることを学んでいく。そうした意味で、生きているナマの生き物が格好の教材となる。

第三に、絵本も教材となる。子どもたちは、絵

本というメディアを通じて自然や動物たちとの付き合い方を学んでいくからである。とりわけ、最近、数多く出版されるようになった環境絵本をはじめ、環境問題を扱った絵本や、自然と環境に関連する絵本は、幼児期の環境教育の教材として非常に有効である（今村 2007）。

絵本は、集団保育の場だけではなく家庭においても読み語られる。家庭における環境教育の可能性を切り開く上でも、環境絵本は魅力的な教材であるといえる。

さらに、環境絵本は「既存型環境教育」を再評価する手がかりともなる。普通の暮らしのうちに環境教育が存在することを思い出すきっかけとなるのである。たとえば、親が子どもを散歩に連れて行くときに、動植物の名前を教えたり、昆虫をどうやって掴むかということを教えたりするなど、身近な生き物とのかかわりを「教え＝学ぶ（模倣する）」ことがある。それは、意図的でもなければ万人に共通する経験でもない。きわめて偶発的で、個別的な体験である。そのために見過ごされがちであるが、子どもの前で親が自然や環境とかわる姿を見て、子どもがそれを真似て同じことを行うとき、そこにも既存型の環境教育が存在する。

どうやら理念先行のプロジェクト推進型の環境教育が花盛りの時代である。だが、足元の何気ない生活の中にすでにある環境教育の営みも豊穡である。とくに、幼児期の環境教育は既存型環境教育の宝庫である。だからこそ、それに目を向けることが、今後の環境教育の営みを切り拓く鍵となるような予感がする。

引用文献

- 今村光章, 2007, 「環境絵本」の分類と制作過程の意義, 環境教育, 17(1), 23-35.
井上美智子, 2004, 幼児期の環境教育普及に向けての課題の分析と展望, 環境教育, 14(2), 3-14.